

序論)

今日取り扱う箇所は、「アッシリアに対する預言」と「ペリシテ人たちに対する預言」、そして、それら異邦の民たちに悩まされていた「主の民に対する預言」の 3 つが書かれています。

恐らく「アッシリアに対する預言」と「ペリシテ人に対する預言」は違うときにイザヤに与えられた預言だったのではないかとされていますが、聖書はこの 2 つの預言を一つの預言として大きなメッセージを私達に教えてくださっているように思います。

神様はこの箇所を通して、私達に何を語ろうとしておられるのでしょうか。御言葉から教えられていきたいとします。

①アッシリアに対する預言

まずは 24 節から 27 節までのアッシリアに対する預言を見ていきましょう。この箇所はアッシリアがエルサレムにおいて【主】に打ち破られ、踏みつけられることが預言されています。しかし、そのアッシリアが倒されるということ以上に「【主】のご計画が必ず実現する。」ということが、強調されて語られています。

そもそも北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされた後、このアッシリアの侵略行為を止めることができそうな国はありませんでした。実際にこの預言がいつイザヤに語られたのかは不明なのですが、後半のペリシテ人に対する預言の箇所には、アハズ王が死んだ年に語られたということが 28 節にありますので、仮りに前半のアッシリアに対する預言も同じころアハズ王が死んだ年の前後に神様からイザヤに語られたのだとしたら、そのころのバビロンはまだそれほど力をつけていませんでしたし、南のエジプトもアッシリアに対抗できるほど強くはなかったのです。だから、バビロン、エジプトというそれなりに力がある国でさえアッシリアに勝てない状態だったので、北イスラエル王国の 6 分の 1 の力しかない南ユダ王国がアッシリアに勝つなんて、まずはあり得ない状態だったのです。

そんな中、その時の南ユダ王国の王様ヒゼキア王はアッシリアに反逆して、アッシリア王様に従おうとはしなかったのです。ヒゼキア王のお父さんであるアハズ王はアッシリアに媚びへつらっていました。アッシリアの力を恐れていた北イスラエル王国とかアラム王国とかは、アッシリアに対抗するために連合軍を作ろうとしましたが、アハズ王はその連合軍には参加せずに寧ろアッシリアにエルサレム神殿の

財宝とか、自分の王宮の財宝を全部ささげてアッシリアに守ってもらおうとしていました。ところが、その息子のヒゼキア王はアッシリアに反逆をしたので、アッシリアは怒ってラブ・シャケという将軍を送って小さな南ユダ王国を滅ぼそうとしたのです。

ヒゼキア王はエルサレムが包囲されて滅ぼされる直前の状態になる前に、一回、アッシリアの王様に、お父さんがやったのと同じように神殿と王宮の銀や金を送って許してもらおうとしましたが、結局ゆるしてもらえずにアッシリアの将軍に攻められることになってしまいました。

ヒゼキア王はその時、イスラエルの人たちになんと言っていたかという、「【主】が救ってくださる」といって民衆を励ましていました。実際、このヒゼキア王は父アハズ王がしていた偶像礼拝をことごとくやめさせて、偶像礼拝をするための礼拝場所を全部壊し、モーセが荒野で「これを見ればゆるされて病気が治るよ」というように掲げた青銅の蛇さえも壊して、徹底的に目にみえる何かではなくって「【主】なる神様に信頼しよう。」と、そのように人々を導いてきたのです。

これに対してアッシリアの将軍はなんと言ったかという、第二列王記18章29節、30節、そして35節にはこのように書かれています。

18:29 王はこう言われる。ヒゼキヤにごまかされるな。あれはおまえたちを私の手から救い出すことはできない。

18:30 ヒゼキヤが、【主】は必ずわれわれを救い出してください、この町は決してアッシリヤの王の手に渡されることはない、と言って、おまえたちに【主】を信頼させようとするが、そうはさせない。

18:35 国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国を私の手から救い出しただろうか。【主】がエルサレムを私の手から救い出すとでもいうのか。」

この後も、長々とアッシリアの将軍のセリフが書かれていますが、ようは「ヒゼキアは一生懸命【主】を信頼しましょうといていたけども、アッシリアは実際、色々な神々を祀っていた国々をことごとく滅ぼしていったのだから、ヒゼキアが頼っている【主】が、アッシリアからお前達を守ってくれるなんてありえない。」そう言って、【主】の守り、【主】の救いというのを完全に否定したのです。

人間的に考えれば、アッシリアとユダ王国の戦力差は天と地ほども離れていたの、アッシリアの将軍がいうことは人間的に考えれば正しいことなのです。

例えば、愛音と私が真剣に腕相撲したとして、誰も本当の力勝負で愛音が私に勝

つなんて考えないですよ。アッシリアとユダの力の差はそれぐらいあったのです。

でも、どのように言われたかという、24節と25節、そして、27節をお読みします。

14:24 万軍の【主】は誓って言われた。

「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの図ったとおりに成就する。

14:25 わたしはアッシリアをわたしの地で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリアのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。」

14:27 万軍の【主】が計画されたことを、だれがくつがえせるだろうか。御手が伸ばされている。だれがそれを押し戻せるだろうか。

『人間的に考えれば勝敗ははっきりしていることであつたとしても、神様のご計画、アッシリアが打ち破られ、ユダが救われるという計画は、必ず成就する。誰もそれをくつがえせないし、押し戻せない。』そう【主】は言われています。

そして、実際、アッシリアはどうなったかという。

神様は、アッシリアの将軍の高ぶった声を聞いて、ヒゼキア王に対してこのように言われ、御業をなされました。第二列王記19章34節と35節と一緒に読みましょう。

19:34 わたしはこの町を守って、これを救おう。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。」

19:35 その夜、【主】の使いが出て行って、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。

神様は、イスラエルをエジプトから救い出して以降、神様が、直接、敵を打つということをイスラエルの歴史の中でほとんどされてきませんでした。基本的にイスラエルが、イスラエル王国になってからは、直接的に神様が、敵を打つというよりは、イスラエル人の中に働いて敵を倒させてくださっていたのです。

でも、アッシリアが【主】に対して高ぶりの声をあげ、ヒゼキアが祈ったとき、【主】はイザヤ書の預言の通りに、アッシリアの軍勢、18万5千人を打たれました。そして、大国アッシリアは撤退することになり、その時のアッシリアの王様セナケリブは、自分の町で偶像礼拝をしていたときに自分の子供たちに殺されてしまいました。

みなさん、どんなにもうダメだと思えたとしても、人間的にはもう勝てないと思えたとしても、最終的に成就するのは人の計画ではなく、神様のご計画なのです。神様が救うと決めたのならば、必ず救われるのです。

これは言い換えるのならば、歴史の主権、皆さんの人生の主権を持っておられるのは、みなさんではなくって神様だ。ということです。だから、私達は【主】の救いの計画を信じ続けていくことが大切なのです。

では、【主】の計画とはどのようなものでしょうか。

アッシリアから救い出されたユダ王国も結局はその罪ゆえにバビロンに滅ぼされることとなります。そのユダが滅びる時期に活動したエレミヤという預言者に神様はご自分の計画をお伝えになりました。それはどのような計画かというところゆう計画です。エレミヤ 29 章 11 節を読みましょう。

29:11 わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——【主】のことば——。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

この預言の後、ユダはその罪のゆえに一度滅びます。でも、神様は「わたしはあなたたちに滅びではなく、平安の計画をもっているんだよ。将来と希望を与える計画をもっているのだよ」と伝えられたのです。これは具体的にはバビロン捕囚からもう一度、エルサレムに戻ってくることができるということですが、神様は一度滅んだとしても、平安と希望を与える計画をわたしは持っているのだとお伝えになったのです。そして、神様はこのように自分のご計画をお伝えになった後、さらに次のようにいわれました。

29:12 あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。

29:13 あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めらば、わたしを見つける。

神様は、バビロンという敵地にあっても【主】に祈り、【主】に耳を傾け、【主】を探し求めるのなら【主】をみつけるよ。そして、やがて【主】のところにもどることになるのだ。そう約束されたのです。

そして、これはイエス様も同じようなことを言われました。マタイ 7 章 7 節、8 節

マタイの福音書

7:7 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

7:8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

みなさん、【主】を求めてください。そうすればすべての主権を持っておられる【主】が必ず答えてくださるのです。そして、その【主】の答えを知ったならばそれを信じてください。どんなに人間的には不可能、無理、もうだめだ。と思えたとしても、私達の人生の主権は【主】がもっておられるのです。かならず【主】の計画が成就するのです。

私達はそのことを信じてまずは【主】に徹底的に御心とご計画を求め続けていきましょう。私はそのために徹底的に祈って、徹底的にみことばと向き合う。それが私達に必要なことだと信じています。

②ペリシテ人に対する預言

次にペリシテ人達にたいする預言を見ていきましょう。私が読みます。28 節からです。

14:28 アハズ王が死んだ年、この宣告があった。

アハズ王というのは先程も話したヒゼキア王の前の王様ですね。

偶像礼拝をし、アッシリアに頼って国を守っていた王様です。

14:29 「喜ぶな、ペリシテの全土よ。おまえを打った杖が折られたからといって。蛇の根からまむしがでて、その実は、飛び回る燃える蛇となるのだから。

比喩が多いのでわかりにくいですが、「おまえを打った杖」というのは、アッシリアの力に頼って周辺諸国を倒したアハズ王のことです。イスラエルの歴史的にはダビデの子孫たちのことです。ペリシテ人はいつもイスラエルに攻撃をしかけてきましたが、ダビデをはじめダビデの子孫たちはこのペリシテ人に勝利をしていったのです。北と南に分裂して力が弱くなったユダ王国においても、アハズ王はアッシ

リアに頼りながら、ペリシテ人に負けないようにしてきました。

でも、アハズ王の息子のヒゼキア王はアッシリアに反逆したので、アッシリアの後ろ盾をなくしました。これはペリシテ人たちにとしてみると絶好のチャンスでした。ユダ王国を倒すチャンスであるし、ユダ王国と手を組んで対アッシリア同盟を組むのにもチャンスでした。だから、ペリシテ人たちはこの時、喜んだのです。

でも、『【主】は「喜ぶな!』とペリシテ人たちにいられています。これはどうゆうことかという、アッシリアを味方につけていたアハズ王が死んでも、次のヒゼキアがペリシテ人を倒すことになる。ということです。

人間的にみるとアッシリアの後ろ盾を失って南ユダ王国は、弱くなったようにみえるけども、そのアッシリアを拒んだヒゼキアがペリシテを打つのです。

これはユダ王国にしてみると、【主】に養われて安らぎを得ることであり、ペリシテ人たちにとっては飢えて殺されることでした。30 節、31 節に書いている通りです。

14:30 弱い者たちの長子は養われ、貧しい者は安らかに伏す。しかし、わたしはおまえの根を飢えて死なせる。おまえの残りの者は殺される。

14:31 門よ、泣き叫べ。町よ、叫べ。ペリシテの全土は震えおののけ。北から煙が上がり、その編隊から落伍する者がいないからだ。

31 節の「北から煙が上がる」というのは、アッシリアがせめてきてペリシテ人を倒すということです。ペリシテ人は一度ヒゼキアに倒され、その後、最終的にヒゼキアの敵であるはずの、アッシリア軍に倒されてしまうのです。

実際、第二列王記 18 章 8 節には

18:8 彼はペリシテ人を打ってガザにまで至り、見張りのやぐらから城壁のある町に至るその領土を打ち破った。

と書かれています。アッシリアに反逆して弱体化したはずなのにヒゼキアはペリシテ人に勝利したのです。それは【主】がヒゼキアと共におられ、ヒゼキアの勝利を【主】ご自身が計画されていたからです。

だから、この 14 章の預言は最後に、ユダヤ人たちに対してこのように語っています。32 節を一緒に読みましょう。

14:32 異邦の使者たちにどう答えるべきか。『【主】がシオンの礎を据えられたのだ。主の民の苦しむ者たちは、ここに身を避ける。』

バビロンも、アッシリアも、ペリシテ人も、イスラエル人やユダヤ人にしてみると非常に厄介な存在でした。人間的に考えると勝ち目がない。不利な相手だと思えるようなものでした。でも、どんなにそういった者たちに苦しめられたとしても、神の民には避けるべきところがあるのです。

それはどこでしょうか。すべての歴史の主権を持っておられ、私達の人生の主権を持っておられ、私達を救い出してください【主】です。

私達、神の民は「ここに身を避ける」とそう宣言するべきなのです。

アッシリアの将軍のように、ペリシテ人のように、バビロンのように、世の人々は、色々と私達を攻撃します。お前たちが信じている信仰は愚かだ。意味がない。お前たちは現実が見えていない。そう言います。でも、私達はそのような声に惑わされずに、「私は【主】に身を避ける。【主】こそ私の救いだ」と宣言しましょう。

それこそが、このイザヤ書を通して、【主】が私達にもとめておられる信仰告白ではないでしょうか。一緒に言ってみましょう。

私は【主】に身を避ける。

【主】こそ私の救いです。

この確信をもって私達は歩んでいきたいと思えます。